

I 総合的な学習の時間 研究テーマ

自ら見いだした課題について、作り出した自分にとっての答えとしての概念を基に、よりよい方法を用いて探究していく子どもを育む学び

II 研究の重点

探究する意味や価値、よさを見いだしながら、自分なりの答えである概念を基に、新たな探究につなげていくための支援の工夫

III 3年次の成果と課題

1. 成果

(1) 自分の思いや願いを踏まえた、必要感のある省察につながる他者評価の場の設定

自らの課題について探究していく中で見いだした概念について、自分が必要とする観点に沿った他者からの評価を踏まえて概念を更新する姿が見られたことが成果である。具体的には、子どもたち同士で話し合う際に、ずれが生まれるような「整理・分析」「まとめ・表現」の場を設けた。

4年「きらり みんなの笑顔あふれるまちⅡ～みんなが笑顔になるためによりよいかかわり合いを求めて～」では、地域の留学生やハワイの児童との交流を経て、関わった人に見られた特質について、「自分とどのくらい違うのか」と「そのような人を受け入れることができるか」という二つの視点を軸とした座標軸に付箋を貼って表した。あるグループでは、「髪の色が金色の人」という特質について、付箋の場所が大きく分かれていた。理由を聞くと、「髪の色が金色の人は怖い印象がある」というA児の意見と「髪の色が違って全然気にならない」というB児の意見で分かれていた。全体で共有すると「同じくらいの年齢の子で髪の色が違う人がいたが、悪い印象はなかった」「お兄ちゃんが金髪にしているから受け入れられないことはない」といったように、受け入れられるという意見にも様々な理由があることを共有することができた。

5年「きらり みんなの笑顔あふれるまちⅢ～働くってどんなこと？～」では、職場訪問での学びをまとめるツールとして「働く人生ゲーム」を取り入れ、止まったマスで起こる事と得られるポイントに、仕事内容とそれをする意味や価値を表すよう促した。遊ぶ際、「実績P（ポイント）」を積んだC児、「コミュニケーションP」を高めたD児、「やる気P」がみなぎったE児のグループは、他者の主張を聞き合う中で、それぞれ、実績は自信や他者からの感謝に、コミュニケーションは他者の安心感に、みなぎるやる気は自分の向上につながると関連付け、どれも「やりがいP」にいきつく価値として、全員が勝ちだと判断した。種類の違う価値に優劣を付けるという多様な判断ができる場面で、考えを比較して価値の関連付けや統合をしていた。また、「知名度も大事だけれど、やりがいを感じて幸せに働くのが一番」という振り返りから、自分が重視したい価値の自覚にもつながった。

このことから、探究していく中で見いだした概念について、他者とのずれに着目できるような活動や表現の場を設定することで、自分のもつ概念と他者のもつ概念とのずれに気付き、相違点に着目して自分にとってよりよい概念へと更新する姿が引き出されたと考える。

(2) 単元間や他教科間とのつながりを意識した単元構想と単元配列の工夫

単元や教科をまたぐ単元構想により、そこで獲得した概念を生かして探究を進めたり、次の探究に生かす課題設定につなげたりすることができた。また、学校行事とのつながりを意識した単元配列により、獲得した概念を生かす場を設定することができた。

4年「きらり みんなの笑顔あふれるまちⅡ～みんなが笑顔になるためによりよいかかわり合いを求めて～」では、外国語活動とのつながりを意識し、地域の留学生やハワイの児童との交流において、あいさつや質問の仕方を事前に扱うことで、円滑なコミュニケーションを行うことができた。また、「家の中でも靴を履いたまま上がる」や「学校に持って行く物の違い」といった日本にはない文化に触れることで、日本との文化の違いについての課題を見いだすことにつながった。

6年「150周年のベストメモリー」では、学校の創立150周年を記念する行事とのつながりを意識した単元配列を設定した。「全校児童が楽しめるイベントを企画する」という思いのもと結成されたプロジェクトチームは、テレビ番組で行われている「学校かくれんぼ」に応募したいと考えた。実現のために校長や秋田大学学長に許可をもらい応募までこぎつけた。当選しなくても全校のみんなでもやりたいと考え、学校行事で毎年行われている「はとの子スタンプラリー」に目を付けた。抱き合わせで行うため考えることが倍になり、また、初めての内容を企画するので準備に多くの時間を費やしたが、全校児童に楽しかったと言ってもらえることを目指し企画・運営に粘り強く取り組み、やり遂げることができた。

このことから、単元間や他教科間、学校行事とのつながりを意識した単元の構想や単元配列が、探究における新たな課題を見いだしたり獲得した概念を生かして他単元や学校行

事に臨んだりする姿を引き出したと考える。

- 2 **課題** 概念の獲得や更新のきっかけを自覚し、探究の仕方について省察する場の設定
協働的な学びの中で他者とのずれを自覚し、自らの概念を更新する姿が見られた。一方で、概念の獲得や更新までに課題をどのように解決したか、子どもたちが省察することも重要である。
そのために、対象に触れた経験や他者からの評価などによって自らのもつ概念が更新される過程やきっかけについて自覚し、探究の過程を省察する場を設定するための手立てを探っていきたい。